

2024/06/27 16-17時

SPH Faculty Development 2024

Competency 教育の現状（講師 筑波大学医学医療系 我妻ゆき子教授）

Zoom Online 実施

参加者（順不同）；小出、中澤、大久保、松居、奥原、新、西、村上、大西、麻生、宮脇、高木、篠崎、康永、鎌田、加藤、稲田、河添

1. 専攻長挨拶・FD 主旨（コンピテンシー教育の議論背景）

- コア 5 領域を越えた課題として PH を目指すもののコンピテンシー
- 2019 年 PH コンピテンシーモデルの発表（公衆衛生系大学院連絡協議会）
- 東大 SPH でも議論はされ、特論などでの取り上げを開始したが系統的評価未
- 教育評価に取り入れた筑波大学の先行事例から学ぶ機会

2. 我妻教授 ご講演

現教務委員長・3月までプログラムリーダーとしてのお立場から

- 背景；中教審 2040 グランドデザインがベース、ディプロマポリシーに基づく教学マネジメントが求められている
- 専攻から学位プログラムへの制度移行（2020年4月）
- 博士・修正レベルで全学共通のコンピテンス（汎用）を定義、どの科目・どの達成度評価項目と各コンピテンスとを紐づけるかはプログラムごとに設定
- それに加えて専門コンピテンスを学位プログラムレベルごとに追加設定。
- 2007年から達成度評価システムの全学レベルで開発され、修了要件として必須化
- 達成度評価は取得単位からの換算法と自己評価の2つ
- カリキュラム・マップ加算法（各科目ごとにどのコンピテンスをカバーするか紐づけ、重みづけをして、取得単位に合わせて合算して数値化）、教務委員会で議論のうえ決定する。教育情報システム（TWINS）上で学生も教員も情報共有できる。カリキュラムマップはHPにて公開。
- 達成度自己評価は学生自己評価と教員にプレゼンし評価を受ける。特にパフォーマンス（修士論文・インターンシップ・学外活動など）を示す成果物を示す（卒業時に）
- これ以外に単位取得外の活動として国際ボランティアとか学会発表・論部発表などなどもコンピテンス評価に加えられる
- 大学院スタンダードとして3 Policies とコンピテンシーをHP公開
- 修了生アンケート（R2）；身についたと感じるか、知の活用力、マネジメント、コミュニケーションが7割くらいは感じる・大いに感じると。

- 評価の可視化は社会的情報発信・公表に貢献しているか、どう学生のキャリア形成に有効かなどは引き続き検討が必要。
- カリキュラムマップなどの実例提示。
- 学生は2年生の4月と最終の2回にわたって自己評価を行い、それぞれのコンピテンス到達について評価したものを提出、指導教員が署名・endorseして教務委員会に提出、教務委員会で判定。

3. 質疑応答

康永先生；教務委員会の役割が極めて重要、各科目ごとにマトリックスに当てはめるのは膨大・難しい作業だと思われるが、(自分が担当しているもの以外について評価しなくてはならないので)、どのように教務委員会は科目評価・議論のまとめを進めておられるのか

我妻先生；始まって2年くらい、プログラムレビューの過程で先行した工学部などの事例を参考にしつつ進めた。オムニバス講義などだと難しい。カリキュラムマップ作るのに3年かかっており、今でも講義内容の変化などを反映しつつ見直しを繰り返している。FDなどで教員の間で問題意識・情報の共有を図ることことが大切だった。

康永先生；ファカルティ間での情報共有がよくされている点は東大SPHも見習う必要がありそう。

大西先生；教育管理として専攻内のガバナンスを高める作業を積み上げておられる。

履修主義的・習得主義的アプローチの組み合わせか？

我妻先生；カリキュラムマップによる履修主義的なアプローチと対話・相互評価による習得主義的アプローチの双方が必要との認識である。この評価表が実際に評価されるのは修士論文審査委員会(指導教員は外されて第三者審査になっている)が論文審査にあたって加味する情報という位置づけになっていて、修士論文評価基準(公開)に沿ってオープンな評価となっている。運営・教務委員会のクローズドな評価で終わり、というようにはしていない。

橋本；専門コンピテンスの議論はどのように進めたのか？

我妻先生；もともと人間総合科学で、工学のようにとがった評価の観点よりは、学術領域を越えたものに共通し社会が求めている実務者養成の観点からまとめた。

橋本；ファカルティ内での相互ならびに自己評価のために、コンピテンス評価の意義などを共有化するためにどのような進め方がよいのかアドバイスを。

我妻先生；各分野の評価を、協議会メンバーの慶應義塾大学が実施した自己点検評価の枠組みを利用しつつ、これと筑波大学内のプログラム評価を並行して実施した。つまり対外的に自己評価内容を問われているという外的要因があったことは、動機付けになった。外から評価を求められたことが内部での議論のハードルを下げてくれて、

去年のプログラムレビューを用意するのにも理解が得られやすかった。

橋本；今後東大 SPH としても、4 年後の大学基準協会の評価ほか受けるうえで、どのような人材を育成していくのかビジョンの明確化と、それを実現するためのカリキュラム構成・評価を統合的に検討していくことが求められており、筑波での実践を参考に内部での議論をさらにすすめていければと思う。

以上